

武蔵野日曜集会

受肉

——ヨハネ伝第1章2～18節——

1967年6月18日（武蔵野）

小池辰雄

生命は人の光 神秘的な光 真の光 具体的に存在をもって受けとる 神・キリストに直結 受肉 恩恵と栄光 恩恵と真理 恐ろしいのは人間の心 隠された福音 父の懷の中に 「お前は今日、私と一緒にパラダイス」 聖霊のバプテスマの現実

【ヨハネ1:2～18】

²この言は太初に神とともにあり、³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。⁴之に生命あり、この生命は人の光なりき。⁵光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。⁶神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。⁷この人は証のために来り、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。⁸彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

⁹もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。¹⁰彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。¹¹かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。¹²されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。¹³斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生れしなり。¹⁴言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。¹⁵ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『わが後にきたる者は我に勝れり、我より前にありし故なり』と、我がかつていえるは此の人なり』¹⁶我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。¹⁷律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。¹⁸未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

●生命は人の光

²この言は太初に神とともにあり、
神のもとにあるという。



³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

これは素晴らしい宣言であります。

⁴之に生命あり、この生命は人の光なりき。⁵光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

あるいは、「之に勝たざりき」という。

⁶神より遣された人いであり、その名をヨハネという。

洗礼のヨハネです。キリストの先駆者です。

⁷この人は証のために来り、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。⁸彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

まず8節まで。

³万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

「万のものはこの言によつて成つた」という。言によつて成るとは「誠」と書く。神さまのなさることはすべて誠である。

「成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし」

というんですから、万象は霊言によつて、霊言という驚くべき霊的な実在によつて成つたという。「之に生命があつた」という。生命が力なんだ。力のないものは生命でないですよ。本当の力を、内的な力を持たないような生命はひとつも生命ではない。物理の法則だつて力で動いているんですよ。とにかく、エネルギーです。法則だけでは動きはしない。また、力と法則というものは離すことができない。法則を乗り越えるような、破るような力だつたら、それはおもしろくない力です。

そういう大調和がある。人間の歴史は一切のものを地から集めて作つただけけれども、もとをたせばみんなこれは、神の言によるところの力によつて成つた。そうでないものはひとつもない。我々の存在そのものが正にそうである。どう考えたつて、この驚くべき実在者の手から離れるわけにいかん。詩篇139篇に書いてあるとおりです。

「⁷我いずこにゆきてなんじの聖霊をはなれんや。われいずこに往きてなんじの前をのがれんや。⁸われ天にのぼるとも汝かしこにいまし、われわが床を陰府にもうくとも、視よ、なんじ彼処にいます。」(詩篇139・7・8)

「天にのぼろうが、地の底に行こうが、視よ、そこに汝はあるなり」

と。天地創造、創世記1章の、

「これすべて好しと見たまえり」

と。「トーブ」という。神さまの造つたものは全部「好い」と。

「神の造り給うものはすべて好からざるはなし」



という。余計なものなんてものはひとつもない。ひとつの虫けらでもその存在の理由がある。
4 之に生命あり、この生命は人の光なりき。

「ロゴス」という「霊言」といわれるところの事態。霊は、言は、生命と発する。神の霊と言とは同じことであります。物理の世界では、何かしらんけれども、最後は物質ではなくて、何かエネルギー的な波状的なものであるというようなことをハイゼンベルクが言いましたけれども。

その生命は光であるという。「光」という漢字は素晴らしい明るい字です。およそ光の嫌いなもの、隠花植物なんでものは嫌いだね、僕は。向日葵は太陽に向って咲く太陽の花という。とにかく、天気がわるいと、人間の気持ちも少しふさいだり、天気がよいと少し明るくなる。それほど外側の太陽の光によって我々の気分もちがってくる。

「雲のかたにはそれでも太陽は照っている。暗くまた何かもの憂いようなこともあろうけれども、君の運命は誰の運命とも同じで、誰の人生にも雨が降ることがある」

という、「レイニーデー」という詩がある。

光は、太陽の光も雲のかたにある。いわんや、ヨハネ伝で言っているところのこの光は、我々が何か滅入ったり、はかなんでみたり、少し具合が悪くなってみたりというようになきにこそ、この光はいよいよ強くその人に照り輝いてくる。これを受けとつていかなくはないかん。

●神秘的な光

ミカ書7章7節から、

「⁷我はエホバを仰ぎ望み、我を救う神を望み俟つ、我が神われに聴きたもうべし。⁸我が敵人よ我につきて喜ぶなかれ、我仆るれば興あがる。幽暗に居ればエホバ我の光となりたもう。⁹エホバわが訴訟を理し我がために審判をおこないたもうまで我は忍びてその忿怒をこうむらん。其は我これに罪を得たればなり。」

自分の悪かったことは悪かったと、こう言っている。しかし、それでへこたれないで、

エホバついに我を光明に携えいだし給わん。而して我エホバの正義を見ん。」

(ミカ7:7-9)

「幽暗に居ればエホバ我の光となりたもう」

と。だから私は言うんです、クリスチャンでくすぶったような顔しているのは何ごとなんだと。

法然とか親鸞とかは非常に霊的な坊さんです。8歳のときから極楽や地獄の幻を見せられたりしたそうです。法然が行脚していて一夜の宿を求めたが断られた。さすがにその家



の婆さんは気がとがめて、雨戸をちよつと開けてみたら、その軒端に寝ている法然から何かしらんけれども光が射していたという。また、法然が念仏を唱えたとその周りが光つていたと、別なところに書いてある。本当に仏の光を身に体して浸透していますから、法然の身から光が出てくる。

アウグスチヌスの晩年でもそうだ。七段階の光の事態を見たらしい。入神的な経験をして、

「私は神秘的な霊眼をもつて自分の視野を乗り越えて、素晴らしい光の中に入った。

……自分の中に光が入ってくると、素晴らしいその光に自分が包まれて、光に燃えることを感ずる」

というようなことを書いている。アッシジのフランシスもちろんそうですし、サンダーシングもそのとおり。中世の神秘家たちはしばしばそういう経験を持っている。神秘主義をただ警戒ばかりしているプロテスタントの人たちはこの神秘家の体験したある大事なものを見損なってしまうているわけです。ただ三昧に入るのではなくして、そういう世界に入ると力が出てきますから、非常にまた行動的になつてくる。

もちろん、お釈迦さんがそうです。こんなことが書いてある。

「……マヤ夫人の胎内に抱かれる。生まれて、全身に光輝いて遍く十方を照らし……、我正にこの世において最も尊きものとなるであらう」

と。これが「天上天下唯我独尊」という言葉ですね。やはり光というものの凄い現象の中で正に彼は誕生しているわけです。

「優れたるおんかんばせ、みいつ高きそのみ姿、かくのごとくあきらかなるものまた世にあらんや。日月、玉の輝きもみなことごとく光を失う露のごとし」

と。日月の光もお釈迦さんから発する霊光に比べては露のごとしとは、また凄い形容ですがけれども、とにかく、太陽の前のローソクのごとくになる。

キリストの今天界にある事態も、もの凄いまばゆい光であることはサンダーシングもそう言っている。とても比喻できない光の世界であると。私も一度、これは夢とも幻ともいえない事態におきまして、たしかにこの世の光とはちがう、この霊的な光というものは特別な光であるということを体験したことがあります。

とにかく、清らかな本当の宗教の世界にすれば、霊光という表現をとまなうところの発光の事態というものは本質的なものであるということはどうしても言わざるをえない。だから、「イルミナツイオン」「光明」なんていうことが出てくる。これはアウグスチヌスが言った言葉です。「照明」という。根源の神から光が流れてくる。そして万象を潤していく。やはりアウグスチヌスもそういうことを体験したから、「イルミナツイオン」なんていう言葉が出てきた。また、プロチヌスは「流出」と言った。神的なものが流れ出るという。



●真の光

⁵ 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

「これを悟らなかつた」とか、「これに勝たなかつた」とか訳される。光と暗黒。自然界では明に対する暗。こちらは生命であり、あちらは死。そういう対照になっているわけですから。

⁶ 神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。

要するに洗礼のヨハネが光について証しようとしてきた。

⁷ この人は証のために来り、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。⁸ 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

⁹ もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。

ヨハネ伝では「世」というのは「暗黒」の側です。「世」とは罪の世。世に対しては「天国」。この世は現世、罪の現世です。神は「真の光」と書いてある。光といひましても特にこの9節では、「真の光」とある。「真理」という字からくる形容詞ですが。真理そのものであるところの光。

「恩恵と真理」という。もちろん、太陽の光も光に相違ないけれども、ここに今いわれているところの光は自然現象の光ではない。この光こそ、この霊光こそ、まことの光であつて、まことの光であるから――「まこと」というのは観念ではないから――本当の生命を持っている。本当の義を持つているし、また恵みを持つている。そういった光である。だから、単なる現象的な光ではなくて、光という言葉をもつてあるひとつの大事な、非常に素晴らしい内容を言おうとしている。

「光が世にやってきた」

というのですから、暗黒の世に何かをしようと思つてこの光が臨んできた。

¹⁰ 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。

世は彼によって成つたのに、実はその事態から脱落してしまつて、罪となり、暗黒となり、死を当然持つようなものになつてしまつたというわけです。

¹¹ かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

もうこうなつてくると、この「かれ」というのはハッキリ、キリストであることが明確になつてくる。「己の国」即ちイスラエルの国にやってきたのに、これを受けなかつた。もつと広くいえば、「この世界」ということになりますけれども、具体的にはイスラエルである。「己の民」、イスラエルの民は今でもこの光を受けない。ヨハネ伝にこう書いてあつても、ユダヤ人はキリストをヨハネ伝でいつているような光とは見ない。困つたもんだ。非常に頑ななんだ。

●具体的に存在をもつて受けとる

¹² されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあた



え給えり。

「之を受けし者」という。これを信ずる者。だから、私は「信受」という言葉をよく使う。からだで受けとる。具体的に存在をもつて受けとることが「信ずる」ということです。「信ずる」とか「信仰」とかいう言葉がなにか非常に観念的にずれてしまっているから、どうしてもこれをぶち破らなければダメです。存在的にならないことには、信仰の世界は本ものにならないです、いわゆる「信ずる」でやっているうちは。受けとるんです。具体的に受けとらなければダメです。

「キリスト教とはそういった教えですか。分からないけれども信じておきましょう」

なんて、そんなものは信仰でも何でもありません。受けとるまでは、キリストが光であり、生命であり、天国であり、義であり、真理であり、恵みであることがわからないんです、いわゆるただ信じているうちは。なるほど頭ではみんなわかります。けれども、それではどうにもならない。それでは使徒たちの、預言者たちの次元とはちがう。ここなんですよね、いつもその分かれ目は。皆さんはこの受け方をいよいよ深くしていただかなくてはならない。

「之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり」

と。「神の子となる権」の「権」というのは、権威です。権威とか権能とかいう。キリストは権威ある者のごとく、権威ある者として、権威ある者らしく語られた。

「学者の如くあらずして、権威ある者らしく語られた」

とある。皆さんはこの真理を知ると、この「権威ある者」となってくる。信受するまでは権威は出てこない。

祈りの世界でも、ただお願いしている祈りではダメです。本当に受けとつて、感謝と讚美の祈りに変わっていないかといね。どんなに困った事態でありましても、必ずこの信受の角度になってくると、その場が直ちに天国となりますから、もう讚美ですよ。

「こういう場合には讚美できません」

なんてなことはひとつもない。キリストというのは世に勝ってしまったんだ。

「我既に世に勝てり」

という。何をか恐れんや。このキリストが味方ならば何をか恐れんや。「ならば」でなくて「なれば」だ。キリストが味方であるがゆえに何をか恐れんや。

「神の子となる権をあたえ給えり」

という。私たちは、受けとれば「神の子」である。本来、神の子なんです。本来は神の子の実質があるけれども、それが疑似化しているから、今度は私たちは、それによって本当の神の子の実質をいただく。そこにアタナシウスが言ったところの「ホモウジオス」「同質性」ということ、

「イエスと神と聖霊とは同質である。キリストは神に類似しているのではなく、同



質である」

と。私たちは、キリストの贖いを通してです、贖いを通らなければダメです。十字架の贖いを通ったがゆえに、私たちはキリストと同質である。あいからわず、同質でないものがありますよ。罪びとにすぎない。けれども、同質なものもまたあるという矛盾構造です。そして、同質なものが中心になっている。それは聖霊を宿しているから。

「聖霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

という。聖霊を宿したら、聖霊は神・キリストと同質なんだから、同質性を既にいただいている。天国体です。

「汝らは世の光なり」

と。「お前たちは世の光である」とキリストが言われている。なぜ、その光であるかというところ、聖霊の火が来たらば、お前たちは世の光であるが、そうでない観念信仰では光にはならない」

というわけです。それは影だ。光みたいなのもの。レッテル・キリスト教ではダメ。

「汝らは世の光なり」

「はい、あなたの聖霊が私たちの中で光り輝くがゆえに光でございます」

と、それがハッキリ言えなくてはいかん。聖霊はまた義の霊でもあり、愛の霊でもある。

「汝らは世の塩なり」

「はい、そうです」

と。そういうことであります。

●神・キリストに直結

13 斯^かる人は血脈^{ちすじ}によらず、

はいそうですよ。「お父さんが信仰があつたから私もあります」なんてなわけにはいかない。「お父さんが盗人だったから私も盗人だ」でもない。

「義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰すべし」

とはエゼキエル書の有名な言葉だ。我々一人びとりはみな責任ある存在である。エゼキエル書18章19節から、

「¹⁹しかるに汝等は子なんぞ父の悪を負わざるやと言う。それ子は律法^{おきて}と公義^{ただしき}を行いが凡ての法度^{のり}を守りてこれを行いたれば必ず生くべし。

律法をついに実行したら必ず生きるという。

²⁰罪を犯せる靈魂は死ぬべし。子は父の悪を負わず父は子の悪を負わざるな

り。義人の義はその人に帰し悪人の悪はその人に帰すべし」(エゼキエル18・

19～20)

と。これは非常に現代的な考えをエゼキエルは持っていた。即ち、我々は責任ある存在で



あります。一人びとりが責任を持つている。自由と責任は離すことができない。今は、「自由、自由」なんて言って、責任のない自由がたくさんある。

肉の欲^{ねがい}によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生れしなり。

と。上から、非連続の連続で、神に直結するという。我々は一人びとりが神・キリストに直結するようにできている。カトリックの方は、法王がいたり、司祭がいたりして、告戒とかいつて罪の懺悔を密室みたいところで聴くんだよな。我々はそんなことをする必要はない。一人びとりが直ちにキリストに一切を打ち明けて、そしてその十字架に赦されて進んで行けばいい。キリストには絶対にごまかしはききませんからね。それはもう平伏^{ひれふ}すよりほかはない。

●受肉

14 言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に

父の独子の栄光にして恩恵^{めぐみ}と真理^{まこと}にて満てり。

今日のところで一番大事なのはこの14節と18節ですが、楕円の二焦点みたいなものだな。

「言(ロゴス)は肉(サルクス)となって我らの中に幕屋を張った」

という。「肉となった」と。いわゆる「受肉」という。即ち、キリストなんてものは、霊界にいたのではわからない。

「我はアブラハムより先にありしなり」

という。霊言として、ロゴスとしてキリストはアブラハムよりも先に、世の造られる先に神と共にいたのですから。アブラハムどころのさわぎではない。それは我々には不可知です。「神さまは在る」なんて手放しで言ったら、それは偽りです。そんな勝手なことは言えない。「神さまは在る」というのは、神と同質であって神の一切をそこに具現する、啓示するところの事態がそこに現われた。だから、キリスト教のことを啓示宗教という。霊的なものが我々の五感の世界に現われて、それが「肉となった」というのは「人間となった」ということです。私たちと同じ人間となった。なにも特別な人ではないんだよ、イエスというのは。やっぱり人間として泣いたり、笑ったり、ご飯を食べたり、水を飲んだり、そういう普通の人間となって、

「私たちの中に幕屋を張った」

という。具体的な人間となって、我々の中に幕屋を張った。その「幕屋」というのは、特に彼にとっては「肉体」が幕屋なんです。「肉」ではなくて今度は「肉体」といわれる。「受肉」の方は「肉」であって、「幕屋を張った」というのは、パウロがコリント前書で言っているとおり、私たちのこの肉体のことを「幕屋」という。「幕屋」にはいろんな意味がある。

我々の霊的実存共同体、集会がまた、私が言っているところの「幕屋」であります。

「視よ、神の幕屋、人と偕にあり。神、人と偕に住み、人、神の民となり、神



みずから人と偕に在^{いま}して」(黙示録21・3)

と、黙示録21章に出てくるのを「神の幕屋」という。

そういう集まりのことを私は「聖霊の幕屋」というわけです。御霊が私たちの中に支配しているから「聖霊の幕屋」です。キリスト教にはカトリック、プロテスタント、さまざまな集会、教会がある。それを全部大きくくくって、「キリストの幕屋」という。それから、新天新地が来て、歴史の終末において「神の国」が来たときに「神の幕屋」というのが最後の幕屋です。「聖霊の幕屋」、「キリストの幕屋」、「神の幕屋」という三段の構造になっている。これは私の「無教会神学論」に書いてあります。

それで「私たちの中に宿った」という。即ち、具体的に幕屋を張って、肉体をとって私たちの中に宿った。「体の宮^{からだ}」という言い方がヨハネ伝2章21節に書いてあるでしょ。

「²⁰ユダヤ人いう『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんじは三日のうちに之を起すか』²¹これはイエス己^{みづか}が体の宮をさして言い給えるなり」(ヨハ

ネ2・20～21)

この「宮」が「幕屋」と同じ字です。

「私が即ち、活ける宮、活ける神殿である」

と。復活の体、霊体であるところの、そして甦るところのキリストが自分のことをそう言われたわけです。まずイエスなんていうのは、その当時のイスラエル人にとつて不届きなことを言うわけです。みんな、「けしからんことを言うやつだ」と思う。ところが、もう次元が、けたが違う。私たちは聖書のこういつた霊的現実というものを本当に内側に持たなかったら、信仰なんていつたって、最後には疲れてしまうよ。

キリストはその実存がもの凄いものであることをここで証しようと思つてやつて来たんだ。キリストは神の光の、生命の、その証人である。これは最大の証人です。神の聖者です。そういう証をする人。これは最大の証人^{あかし人}です。だから、福音書を読んで、キリストにぶつかつて、

「これはいかなる聖人君子もその真似はできない。これはもう違う」

と、その前に降参するまではその世界に入れません。降参したら、キリストの中に入ったら、今度は自分が同質の証人にされていく。

●恩恵と栄光

14……実に父の独子^{ひとりご}の栄光にして恩恵^{めぐみ}と真理^{まこと}とにて満てり。

実に父の独子の栄光にして恩恵と真理で満ち満ちているという。恵みというのは、この罪の世、現世、罪、暗黒、そういうやつをみんな滅ぼしていくのが恵みなんです。なにか上からちよつと下さいなんていうのではない。恩恵というのはそういったものをみんな滅ぼしてくださるということ。



「我らその栄光を見たり」と。キリストはルカ伝9章のあの変貌の山でウワーツと変わってしまっただけ。あれはもちろん神の栄光のひとつの顕れです。けれども、キリストがやったこと、言ったこと、これが全部、神の栄光の顕れなんです。恩恵が同時に神の栄光の顕れです。神の栄光の顕れが直ちに恵みであり、恵みは即ち神の栄光の顕れである。聖書の事態はちゃんと渾然たるひとつのことをあつちから言ったり、こつちから言ったりしているだけの話です。

「実に父の独子の栄光にして」と。これはこの人だけが顕しうるところの栄光で、他のいかなる被造物も表わすことができない。何となれば、他の被造物はみな自我、罪にとらわれているから。我々はみな「罪びと」である。罪びとであるとはみな我執の人間であるということ。人間は本当は決定的に人を愛しえない。人間というものはアガペー的に愛しえない。だから、これを「罪びと」と言う。キリストの恵みのような、「愛する」とは相手を救いあげていくことが本当の愛です。「恵み」という字は「救済」という言葉と同じです。キリストが言う「敵を愛する」とは、敵を救いあげることが「愛する」ということ。敵を愛するというのは本当にどん底から敵を救いあげるような、そういったキリストの本願をもつてかかっているのが「敵を愛する」ということ。これはできる。「感情的に好きになれ」なんていうのではないのだから。

「本当に嫌な野郎だけれども、これを何とかいい野郎にしてやろう」と言っただけで、かかってくるころの愛は、それは本当の愛だ。

「嫌なやつだが、仕方がない。キリストが愛せと言うから、少し無理して愛そうかなんて、そんなことをしたって、ひとつも愛になりはしない。そういうのが「敵を愛する」ということ。だから、何と言われても、もう楽になつてしまふでしょ。

「汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ」(マタイ5・44)

と。「はい、できます」と。無教会の方々が何とおっしゃつても、私はひとつも痛くも痒くもない。私みたいなガラクタを通して本当のことが現われれば、人間の魂は本ものには必ず何か触れるものを持っている。魂の世界はごまかしがきかない。うそものではどうしても響かない。

「我らその栄光を見たり」と。福音書にきて、キリストの中に本当に読み込んで、なんと素晴らしいかと。もし、キリストが言葉に水を割ったり、いい加減な行為をしていたら、私たちはキリストの前に降参するわけにはいかないよ。ところが、キリストは一つの言葉といえども絶対に水を割つてものを言わない。私たちに不可能なことを遠慮会釈なく突きつけている。私たちはどのキリストの言葉に應えることができますか、及第できますか。みんな落第です。そういうふうに、落第するような言葉を突きつけておいて、これが恵みだとは何ごとかと。

「そういう素晴らしい世界に、私の中に入ってみろ。そうしたらば、その言葉がい



かに烈しくても、烈しければ烈しいほど、それが即ち恵みであることを知るぞ」

というわけです。この全聖書は、何といたって、福音書にかなうところはありませんよ。聖書全66巻はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書にかなうところはない。何となれば、キリストの行為と言葉がここに満ちあふれているからです。パウロの書簡がいかに素晴らしきろうが、ヨハネ黙示録がいかに素晴らしきろうが、福音書にはかなわない。現実そのものがぶちまけている世界だから。私たちはこのズバリの世界に入れられてしまつて、その中からものを言っているわけですから。外から説明しているのではない。

●恩恵と真理

14 ……我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて

満てり。

この「恩恵と真理」をバラバラにしてはダメです。この「と」はただ二つのものを並べているのではない。キリストの真理は観念の真理ではないから——もちろん、観念の面からも真理と言ったってわるくはないけれども——それは同時に、その真理は私たちに真理を与えようとしているところの真理である。「これは真理である」とただ掲げているのではない。与えようとしている真理であるから、この真理が同時に恵みである。

なぜそうかという、キリストは私たちと同じ人間である。だから、キリストは非常に危機的存在ですよ。人間だから、いつ罪を犯すかわからない。いつサタンにやつつけられるかわからない。そういう我々と同じ同質の世界に——それこそ人間とホモウジオス(同質性)なんだ——人間と同質でありながら同時に神と同質である。

「神の独子にして神なり」

ということ。神との関係からいえば、キリストは「神の子」と言っているんですよ。けれども、質からいえば、キリストは神の子ではない。神なんだよ。神人である。神との関係では、キリストは神を「父」と言っているから、自分は「子」に決まっている。

「キリストは神か、神の子か」

なんて言つて、一生懸命で議論しているから、おかしくてしょうがないんだ、僕は。キリストは神の子であつて神であると、私はハッキリ答える。「神である」というのは、ゴットハイト(神性)を持ったものであるということです。神性を持ったものである。だから、「神である」という。ただ神との関係においては「子である」というだけのはなしですよ。

そういう、人間という危機性を持つていながら——しかも、私たちの中でよく内容が分かっている。これを見るとね。これは私たちには不可能であるが、それを本当に可能にしようとして——キリストは神を実に実現している事態を証して、

「この危機的人間の中においてかくも真理が現れているのだ。そして、この真理を本当にお前たちに与えよう」



というわけです。

人々はいろんな自分の才能を持っている。いろんな課題を人生で持っている。それに対してどういうことが真理であろうかといって、いろいろの社会科学を――大いに社会科学をやってくださいよ。マルクス主義の中にも真理はありますから――大いにそれをやってみるんだが、しかし、それが本当にどのようなようにして実質をもって限りなく展開していくかということになると、真理のうちの真理であるところの、真理の根源体であるところの――光でいえば、キリストは白光ですよ――白光であるキリストを受けとったときに、これが本当に真理であるから、一人びとりのそれぞれの人生の課題における、今度は派生的な真理に対しての本当の原動力を与えていく。またこれをして間違いなからしむる。

●恐ろしいのは人間の心

「キリスト教は愛であるから、社会的な問題はそちのけでただ愛せばいい」

なんて、そうはいかん。この複雑な社会においてはやはり思想の問題もあるし、行動の問題もあるし、いろいろな事態があるから、大いに具体的に、組織が必要ならば組織も要るでしょうし、社会的な実践的なことも大いに組織的にやらなければならないときもあるでしょう。ただし、そういうものをもつて人間の世界は直ちに解決すると思つたら、それは越境である。マルクス主義者がやっている越境はそこにある。彼らの中に大事な真理があつて、大いに人を愛してやっついていいですよ。けれども、そのところで、人間がたえそれが思うように満たされても、それでこれが完全な救いの世界、喜ばしき幸福の世界になるか、社会になるかというところ、そうはいかん。

人間は根本的に人間そのものが失われているということ忘れてはいかん。人間そのものの失われているものが、もし外形的なものでもって解決ができていくのなら、もう世の中はとつくの昔に解決してしまっているわけです。ところが、どんなことをもつてしても解決がつかないという。やっぱり、戦争につぐ戦争をしている。もう中国が水爆なんかを造っている。だんだんおかしくなっていく。

結局、恐ろしいのは水爆でも原爆でもない。恐ろしいのは人間の心である。人間の心が一番恐ろしい。満たされればまた欲が出てくる。とにかく、人間というやつはそれ自体が限りなくそういうように出来ている。癌という病気がやつかない病気だといふけれども、一番癌中の癌は人間の心です。我々のこの心が癌中の癌なんだ。この心を一遍やつつけてしまわなくては。決定的な宗教に在って行かなくては。それはもちろん十字架です。十字架でもつてその心が、

「われキリストに十字架せられたり」

というところに来て、パウロがこの癌中の癌から抜け変わるわけです。パウロの己を義とする癌がとれてしまった。



人間の性格は変わりませんぞ。けれども、本当にそこでもってぶっ倒されて、本当にそこでもって回心させられたらば、変質することは可能であります。けれども、人間は罪びとだから、どこかに死に至るまでつきまとっている。ただその人がそいつをもうひとつ別なもので征服していくかいかないかに問題がある。パウロだって、時々昔の癖が出てくるんだ。その書簡を読んでいるとわかる。けれども、そいつはやつつける。

「われ弱きを誇る。キリストの力が顕れんがために」

というのはそういうことです。

「なんとキリストは本当に真理だ。実力を持った真理だ」

ということを具体的にあなた方は、いろんな課題を通してわかってくださいよ。何も政治や経済や学問に、いきなり宗教だなんて言っているんじゃない。この魂の世界はいかなる人間の文化的なものをもつてしてもどうにもならん。哲学をもつてしても、芸術をもつてしても、何をもつてしても、これはダメです。一番魂の世界でキリストという真理をもつてこの世界が開示されてくると、今度はいろいろなことが本当に働きます。

「また始まったか」

ではないですよ。これはもう徹底的に、私はこれをあなた方に語りながら、自分でまたその世界に深く入っていくだけのはなしです。

「今朝ご飯を食べましたから、もういいです。明日の朝食食べなくてもいい」

なんてなわけにいかん。我々の魂もまた新たに真理をつかまえては、いよいよ深められていくわけですから。日曜毎にこうやって魂が前進させられる。その日曜をいい加減にしていたら、また後戻りしてしまうよ。

●隠された福音

「言は肉体となりて、我らのうちに宿った」

私たちの中にやって来たというのは、私たちの中に関わりを持っている。このキリストという人物は関わりをもつためにやって来たんですから。この関わりをいい加減にしたらしょうがない。だから、どうしても、

「このキリストと一緒になりましょう。キリストを生きましょう」

と、私たちはキリストを生きる

「お前たちは私を生きなさい。そうしたら、神の栄光が、私のうちに顕れた栄光が現われる。真理が現われる。何でもござるぞ」

ということですから。これを「信ずる」という言葉ではどうにもうまくないな。受けとること。キリストは「ギブ」、私たちは「テイク」。「ギブ・アンド・テイク」であると。そしていよいよこつちがまた「ギブ」のひとになるわけです。

15 ヨハネ彼につきて証をなし、呼わりて言う『わが後にきたる者は我に勝れ』



り、我より前にありし故なり」と、我がかつていえるは此の人なり』

こんなもの（我）はもう問題じゃないと。とうていケタが違う。「我よりも強い」なんていっても話にならない。自分はローソクであるが、彼は太陽であると。

¹⁶ 我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、

ここにも「受けて」と書いてある。その中から受けまして、

恩恵に恩恵を加えらる。

正に恩恵に恩恵を加えられる。もう溢れてくる。こんこんとして泉してくる。恵みに恵みを加える。これでいいなんていうところはない。恵みに恵みが加えられると、この恵みはあなた方を破つてずっと向うへ流れていくわけだ。

「腹より永遠の泉が湧き出るぞ」

とヨハネ伝4章にあるとおり。

¹⁷ 律法はモーセによりて与えられ、

「かく歩くべき」という道はモーセによって与えられた。モーセは道しるべだよな、キリストは道そのものです。

「我は道なり」

という。実は律法は「隠されたる福音」であつたことは前にも申し上げておりました。律法の

「汝、殺すなかれ」

は「殺すなかれ」でなくて、

「汝は殺人はしない」

ということ。

「我はお前の神であるから、お前は殺人なんかできっこないんだ」

というのが本当の律法の精神であつたから、律法は隠されたところの福音であつた。隠された福音として受けとつたのはキリストだけであります。「隠された福音」なんて言葉はまだ誰も言わないようだが、自然に出てくる。

カントが、

「人間の心の奥の道德の法則を思えば思うほど、いよいよ畏敬の念をもちまた驚嘆する。また、宇宙の法則を思えば思うほど畏敬の念と驚嘆にかられる」

と言う。そういう法の世界です。D大学の校歌に

「法を守りて自由あり」

と私は歌った。法に即して自由がある。「守る」というのは本当は「即する」ということだ。恵みに即すると、生命の御霊の法に即すれば、

「御霊の法によって私は罪と死から解放されて自由になった」

とパウロは言っているじゃないですか。霊法の世界に入ったら自由になった。そういう法



則がなんと素晴らしいかなとカントは賛嘆したんだが、この靈法の世界に入ると、カントの賛嘆以上の賛嘆がパウロと一緒に私たちはできるわけです。

本来、モーセの律法は、

「律法を(内側から)行う者は生くる」

と書いてある。「内側から」と書いてないものだから困ったものだね、ただ「行う」と書いてあるものだから。あれは本当は「内側から行う」ことだ。内側から行った者は生くるんだが、外側から行ったって、それは律法の義というものでダメだと。

「律法の義につきては責むべきところがなくても、自分はダメだ」

とパウロが言っているとおりの。ところが、人間はこれを内側から行えない。ということは、神との関係が、神さまと本当に一心に結合することができない。一心に徹しないものだからダメ。

●父の懷の中に

恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。

もちろん、このヨハネがこれを書いているときはもう十字架を通っている世界です。恩恵と真理はイエスによってやって来た。その恵み中の恵み、恵みの焦点となっているものは十字架によるところの贖罪です。贖罪を通さなければ恵みは本当の恵みとしてかかってこない。

直接にはキリストに私たちは直結できない。もしできるのならば、キリストが地上にやって来たときに素晴らしく弟子たちは救われたはずだった。ところが、どうにもならん。キリストと同じかまどの飯を食べてもどうにもならん。キリストに愛せられてもどうにもならん。それは恵みの一番焦点であるところの十字架の贖罪の事態を通っていないからです。ところが、ここで言っているときには、もちろんそれを言っているんですから、そこで18節にきて、

18 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

ちゃんと書いてあるでしょ、「独子の神のみ」と。写本によつては「独子のみ」と書いてある。「懷裡にいます」は、「エイズ トン コルポン」といつて、英語では「ボズム」という。母の「胎」というでしょ。一番お腹の大事なところですよ。「胎内の中へと入っていたもの」という。その中にとつぷりと、父の懷の中に、父の胎内にすっかりと入りこんでいたところの独子。これは私の非常に好きな言葉だ。父の懷に在したこのキリストだけが、独子のみがこれを顕した。キリストはもちろん地上にきて人間となっても、いつも父の懷の中にいるような人であった。日本人にはこの「懷」というのがよくわかる。これが内在関係で、これが本当の信の現実であります。キリストの信とは、父を「信じている」とは、「懷の中に居る」という、「懷の中に入っている」こと。それ以外の事態はもう信とは、私たちはほ



とんと言わない方がいいくらいだ。

接点という事態があるね。いわんや離れていて、信じ仰いで、「信仰」といつている。言葉というものはおかしなものだね。そういう言葉を誰かが使ったら、みんなそういう言葉になってしまう。仰いでいる。接点ならまだいいけれども、これは中に入っている。

「祈りとは、からだを入れて祈れ」

と言ったでしょ。私たちが祈りの世界で本当にこの十字架を通って――十字架を通らなかつたらダメですよ、ただ妙な冥想をしても――ハッキリと十字架の贖いを通って自分は――十字架は門であるから――十字架という門を通ってその中に入る。これはいかなるときも、我々ができるわけです。できませんという人はない。キリストは、

「我は門なり」

という。

「はい、そうですか。では、その門から入りましょう」

と。ただ外側から門を見ていたってダメだよ。門というのはくぐるためにあるんだから、外から見るとあるのではないんだから。門はくぐって中に入るためにある。

「入門」という。キリスト教入門というだろ。あれはいい言葉だよな。聖書入門という。福音入門という。門から入る。ところが、ちつとも門から入らないんだ。「入門」が、ちつとも入らないでいるようなのがたくさんあるんだが、皆さんはどうぞ、何の恐れもなく、十字架を通って入る。

「今まで私はこんなでしたから」

「まだこれからもつと聖書を読まなくては」

「まだどうも人を憎んだりして困りますから」

「自我がまだありまして、ちよつと入るわけにはいきません」

「この頃少し精神状態がおかしいから」

とか、何とかかんとか理屈をつけて入ろうとしない。キリストはもうそんな欠けた事態、一切こういう事態であつても、無条件です。十字架というのは、条件が無い世界なんです。これは無条件の世界ですよ。

●「お前は今日、私と一緒にパラダイス」

もし無条件でなかったらどうですか。あの十字架の片一方の盗賊が、

「私はもう生涯、悪いことをしましたが、せめて、あなたが御国にお入りになるときに私を覚えてください」

「よし、お前は今日、私と一緒にパラダイスにあるぞ」

と。もう死のやがて迫っている瞬間ですよ。あれを口語訳では、「パラダイスにいるであろう」なんて、どうしてああいう訳し方をするかね。キリストは「いるであろう」なんて、そん



なとぼけたような言い方はしませんよ。「お前は、あるぞ」と言われる。ただギリシア語というのはテンスがハッキリしているものだから、これから始まることは未来形を使うだけのはなしですよ。けれども、日本語としては、「あるぞ」と訳すのが、言葉を越えた本当のキリストの奥の把握である。どうしてもこの聖書はもつと大胆に訳さないことにはダメだな。

「今日、お前は私と一緒に天国にあるぞ」

と。「あるであろう」なんて言って、「そうでない場合もありましょう」なんてことになったら、地獄へ入ってしまいますよ。

「あるぞ」と。「はいそうですか」と、片一方の盗賊はいの一番に天界にキリストと一緒に入ってしまった。これは無条件でしょうが。いかに天国は、十字架を通して無条件であるかということを片一方の盗賊をしてハッキリ示しておられる。もう豁然として皆さんの魂は開かれ、霊的な生命力が旺盛になつていかなければうそですよ。

だから、「父の懷にいます独子のみ」とあつたら今度は、私たちはキリストの懷に入ってしまった、キリストの懷にいる私たちはこのキリストの栄光を顕すところのものである。私たちはその使命を持つているわけです。どんなに行き詰まっていようが、どうであろうが、現状がどうであろうが、そんなことは問題じゃない。もう私は正直、この恩寵の世界、この真理そのものの世界に十字架という門を通して入ってしまう。そこには燦々^{さん}と太陽の光よりも素晴らしいキリストの霊の生命が、霊の光が浸透しますから、こんなやつが知らないまに元気が出るわけです。どうぞ皆さんは、そういう証人になつてください。そうしたら、大いに行動的にならざるをえない。

●聖霊のバプテスマの現実

だから、「初めに行為あり」とゲエテが訳さざるを得なかったようなわけです。言、即行であります。御言は同時に行として展開する。これは真理であるから。ロゴス、エトス、パトスという。パトスは恵みの世界、愛だね。エトスは意、実行の世界、現に実行される世界です。そのようにキリストは渾然としているということがわかるわけです。

この14節と18節が、私たちが今日ここでもって学んだところの一番大事なところです。真理は具体的なものである。言は肉となる。私たちのこの具体的な肉体というものを決しておろそかにしてはいかん。この全存在を通してそれは具体的に現われてくる。肉体は罪でも何でもない。罪は、霊の在り方が自我中心であることが罪なんです。ヨハネ書簡に書いてあるでしょ。

「つらつら目にて見、耳にて聞き、手にて触りしところの言」

という。即ち、受肉の言は、キリストというのは、「つらつら目にて見、耳にて聞き、手にて触りしところの」キリストである。それが「言」という。それが具体的なあんな素晴ら



しい、いきなり天界に入ることのできる、靈性を持つていところのキリストの体であった。それはもちろん十字架を通らなければならなかったけれども、その次は靈質に変わらざるをえない。私たちはどんなことがあっても、地上の生涯が終つても、あとは必ず靈体を着て包まれて、次の世界へ展開していく。そのような死んでも死なないところの生命。どんな地上の雲がかかってもそいつを照破して光り照らすような光。どんなに行き詰まりましても、相手をどん底から救いあげていくような愛であります。

「そういう同類として、お前たちはこの具体的な真理そのものの我を通して、我を証していく。そのためには、私というものの懐の中に入れ。私が父の懐に入つた

ように、私の懐に十字架を通して入れ。そこが聖靈のバプテスマの現実である」

と。もうハッキリと、この14節と18節に私たちのクリスチャンの、もう何ともいえない実存の事態が証しせられているわけであります。

